

## [国 語]

# 論理的思考力を高め、意欲的に意見文を書く指導の工夫 情報機器活用の有効性について

— 3年生 メディア社会を生きる—での実践—

西脇 明美\*

## 1 主題設定の理由

中学校学習指導要領〔第3学年〕の目標に「目的や意図に応じ、社会生活にかかわることなどについて、論理の展開を工夫して書く能力を身につけさせるとともに、文章を書いて考えを深めようとする態度を育てる。」とある。また、書くことの指導事項として「ア. 社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。イ. 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。ウ. 書いた文章を読み返し、文章全体を整えること。エ. 書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、もの見方や考え方を深めること。」をあげている。

「書くことがない。」「書き方が分からない。」「これが果たして感想なのか、意見なのか、要旨なのか、要約なのか、書き上げても自信がない。」という生徒の声。3年前、NRTや各種テストの「書く」の領域では計れない生徒の実態が当校にはあった。上記目標を達成するためには、生徒の論理的思考力を高めることが不可欠であると考え。論理的思考力、言い換えれば「筋道の通った思考ができる力」である。井上尚美氏は、「思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—」の中で「論理的思考」の意味・用法には少なくとも三つの用法があるとし、国語科では「直感やイメージによる思考に対して、分析、総合、抽象、比較、関係付けなどの概念的思考一般のこと（広義）」を指す場合も多いことに言及している。そして、これを受けて植西浩一氏は「経験を積み、その経験を言語によって意識化・抽象化・一般化しながら概念を獲得する。さらに、獲得した概念を具体的経験の場に適用していく、このプロセスの繰り返しは、思考力を育てる営みに他ならない。」と言う。

「説明文は『解釈』させるものではない。『理解』させるものである。」と言われて久しい。とは言うものの、「説明的文章で何を教えたらいいいのか。」という悩みや「内容主義」と「形式主義」のバランスの難しさが教師の指導にぶれを生み、それが生徒の論理的思考力の育成を阻む一要因になっているのではないのか。このような指導をいくら継続しても、上記の生徒の悩みは解決されないのではないのだろうか。

そこで本研究では、論理的思考力を高めるために三つの手立てを講じてみた。一つ目の手立ては、学習の導入段階で結論(筆者の主張)の学習経験をする。二つ目のそれは、経験学習で獲得したキーワードと説明文の文脈中のキーワードを適用させて要旨をまとめるということである。三つ目の手立ては、授業を含め「書くこと」の力のベースとなる週末の課題作文の継続である。

3年生の「社会をとらえる」の単元、説明文「メディア社会を生きる」において、学習の導入で生徒主体の「キーワードを核とした新聞記事のタイトル作りによって、説明文の要旨の核たるキーワードの理解」の学習経験をする。展開は、文章の内容を理解するために説明文の基礎・基本を押さえて自力読みをしていく段階。要旨をまとめる際には導入での学習経験で獲得したキーワードの概念を十分に活用し、それを文脈中のキーワードに適用させて書くことに配慮する。そうすれば、まとめでは展開に至る学習過程で高まった論理的思考力を用いて、それが反映された意見文を自信をもって意欲的に書くと考えた。

## 2 研究の目的

本研究は、「書くこと」の領域において論理的思考力を高める手立てを講じれば、生徒は深化した思考に裏打ちされた意見文を自信をもって意欲的に書くことができるようになることを明らかにすることが目的である。

## 3 研究の内容と方法

本研究の内容は、論理的思考力を高め、意見文を書くための教材研究とその教材を用いた授業実践の考察である。県内の公立中学校の3年生の1クラス(男子17名、女子21名、合計38名)に対して、平成20年6月5日から26日に筆者が行った「メディア社会を生きる」の授業を考察した。具体的には次のように授業を展開した。

\* 上越市立清里中学校



めるもの」。レベルMが「前の部分全体の要約を必要とするもの」。このようにして、指示語が指す部分を的確に読み取っていく学習である。要点については、「形式段落中の筆者の言いたい一つのこと」と生徒は理解している。これをトピックセンテンス型とキーワード型に分けて「主・述を含んだ一文」でまとめていく。これらの学習過程において、生徒は内容理解のための自力読みを繰り返すことになる。キーワード「意図」の登場する段落⑬⑭⑮では(1)の学習が反映された要点になっているかにポイントを置いて、机間指導による支援を行った。

(3) 学習のまとめでの意見文を書く

学習のまとめとして、上記(1)(2)の学習を生かし、キーワード「意図」に反映された筆者の主張を理解したうえで意見文を書く。このとき、導入部での「タイトル文作り」の学習が反映されるように配慮する。生徒のタイトル文をまとめた一覧表で意見文を完成する際の参考にした。意見文のテーマは「最終段落で筆者は『メディアの読み書き』についてどんなことが大切だと述べているだろう。」であり、条件は2つ。①前段には「大切だ。」という筆者の考えを、後段には前段に対しての君の考えを書きなさい。②後段にキーワードとして「意図」を必ず入れること。次に、生徒が書いた意見文を挙げておく。

生徒A：「大切なことは、メディア社会の中でメディアについてもっと学ぶことです。また、それによって得られたことを活用していくことも大切です。」

あることからの、正しい視点というものは定まっていなないと私は思います。ですから、当然、情報の送り手の意図も立場上によって異なり、さまざまな視点があります。その意図によって作られたのは、ありのままの現状の情報ではなく、大げさに言えば情報の送り手による『意見文』。それが必ずしも真実ではないことを、情報の受け手は理解しなければならないと私は思います。」

生徒B：「メディアについて学び、メディア社会に飲み込まれることなく、これからのメディア社会を生きていくことが必要だ。」

そのように生きるには、情報の送り手と情報の受け手が互いの意図を理解するのが大切だ。送り手は、自分の意図を相手に伝わるようにして工夫して送る。受け手は、その意図をうのみにするのではなく、自分の考えを持つことが大切なのだ。この送り手と受け手の関係をうまく作り上げることで、メディア社会を生きていくことができるのだ。発達したメディアをうまく活用し、これからの社会を生きていくことが必要だ。」

(4) 国語科の授業を支える学習活動～週末の課題作文学習の継続～

市毛勝雄はその著書の中で、論理的表現力の教育は国語教育を変革するとしてこう述べている。「二〇〇四年にOECDのPISA調査の結果による日本の教育の問題点が発表された。これを機に、言葉による論理的思考力・表現力の指導が不足しているという意見が強くなった。このような歴史的な経緯を経て、国語教育には論理的文章の読み書き指導が必要だ、という考えが定着しつつある。学習指導要領のいう『論理的思考力・表現力』の養成とは、要するに『論理的文章』を読んだり、書いたりする能力を高めよということである。」

市毛氏が言う能力を高めるためには、練習の機会を多くとることが必要である。そこで、「書く」という学習活動においては、生徒は家庭学習課題として週末の課題作文に取り組んできた。授業の中だけでは制限されてしまうこれらの学習活動を家庭学習のメニューに組み込むことにより、学習の機会を増やしてきたと言える。以下に、いくつかの実践を記す。

① まずは、正しい一文を目指す週末の課題作文

文が段落を、そして段落が文章を構築している。基本である一文が正しいものでなければ、しっかりした文章を築くことはできない。週末の課題作文の最初の段階は、正しい一文を書けるようになるための練習である。「一文の長さ。」「主語の挿入。」「読点の位置。」などの観点について、自分の一文一文を確認していく作文の基礎学習である。ここでは「教科通信」を使って事前に生徒に説明しておいた「文の七原則」(宇佐美寛「新版 論理的思考」メディカルフレンド社)と「読点の打ち方」(木下是雄「理科系の作文技術」中公新書)の観点についてのみ練習し、作文の内容についてはまだ触れない。提出された生徒の課題作文は一人一人目を通して十点満点で採点し、添削して返すという作文学習を継続した。文は、短文が好ましい。長いと文にねじれが生じ、分かりにくい文になってしまう。一文の長さは六十字程度、原稿用紙で言えば三行以内で句点を打たなければならないことになる。短文が苦手な生徒には、添削の際に元の文をマーカーペンで囲って返却する。こうすると、生徒は長文であるのが一目瞭然に認識でき、次週の課題には配慮するようになる。また、「『思う。』のはだれなのか、『考えた。』のはだれなのか。」繰り返して添削することで、生徒は一文一文に責任を持つようになってきた。同時に、

<p>「国語教室」 上級市立南里中学校国語科 平成二十年四月十一日(金) 第二号</p>	<p>「文の七原則」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 文をなるべく短く書く。(一文の長さは、六十字、原稿用紙で言えば三行程度)</li> <li>2 なるべく「主語」をあらわに書き込む。</li> <li>3 文相互をつなぐ語句をなるべく入れろ。</li> <li>4 文の末尾は、端的・半直な形にしない。</li> <li>5 他の文章は、正確に引用する。(要約は、なるべく避ける。)</li> <li>6 事例を挙げるべきであり、筆者自身の心理を書くべきではない。</li> <li>7 文章を書いた人間を論ずべきではない。文章の内容の神妙にとらまるべきである。</li> </ol>	<p>読点の打ち方、二考し</p> <p>読点(・)の打ち方は、文章の読みやすさをかなり左右する。以下に紹介するのは学習の初等科(小学校)で教えている規則である。これも用紙の規則だからこれにとわられる必要はないが、一応の目安として役に立つ。</p> <p>a 受けることばが、すぐ続くときはつけない。離れているときはつける。</p> <p>・おじさんは、少年です。</p> <p>・おじさんの家へ、行った。</p> <p>・おじさんは、おじさんの家へ、行った。</p> <p>読点(・)の打ち方は、文章の読みやすさをかなり左右する。以下に紹介するのは学習の初等科(小学校)で教えている規則である。これも用紙の規則だからこれにとわられる必要はないが、一応の目安として役に立つ。</p> <p>a 受けることばが、すぐ続くときはつけない。離れているときはつける。</p> <p>・おじさんは、少年です。</p> <p>・おじさんの家へ、行った。</p> <p>・おじさんは、おじさんの家へ、行った。</p>
--	---	---

原稿用紙の正しい使い方についても確認していく。入学当初のノート指導では、文末に「。」を打つ約束さえおぼつかない生徒が目立っていた。「題名は、二～三マス空けて書き出す。」「句読点や会話を閉じるかぎ( )が行頭にきた場合は、前の行の下に書く。」「会話文はかぎかっこ(「」)で囲む。論理的文章では行を変えずに続けて書く。」などの約束事もこの練習の中で確実に身につけるようになる。その証拠として、書き手の生徒も添削する教師も、作文や添削に費やす時間がぐっと短くなっていく。

## ② スモールステップ～書き出しの工夫をポイントにした週末の課題作文～

文の七原則で正しい一文をマスターしても、作文への移行の段階で「書き出しが決まらないから、書けない。」と悩む生徒がいる。それに対して、三つの型を提示した。ア 会話、イ 情景描写、ウ 引用での書き出しである。評価の観点も「書き出し」のスモールステップ一つに絞って添削した。次に「水の作文」の書き出し練習の生徒の意見文を挙げておく。

生徒C：「うわー、何これ。」

「お母さんの子どものときは、川の水はとてもきれいで油なんて流れていることはなかったけどね。」

「へー。お母さんも、昔、川で遊んだことがあるの？」

「あるよ。水がきれいだったから泳いだり、もぐったりして遊んだよ。でも、油が浮いているんじゃ泳いだりできないよね。」

どうして、川の水は汚れてしまったのだろう。その原因は、私たちの生活にありました。(以下略)

生徒D：桜もすっかり散り落ちて、青々とした葉桜がとってかわった。青く澄みきった空が、「さあ、でかけよう。」と、私の心に語りかけてくる。

今日は久しぶりに、友達の家を訪ねることになっている。高まる気持ちを抑えながら、私は自転車にまたがった。ペダルを一こぎするたびに、心地よい風が顔に当たる。最高に良い気分。と、そのとき、「バシャッ。」よそ見をしていたので、田んぼに落ちてしまった。(以下略)

生徒E：「おらが梨平の 清水を飲めば、八十ばあちゃんも若くなる。

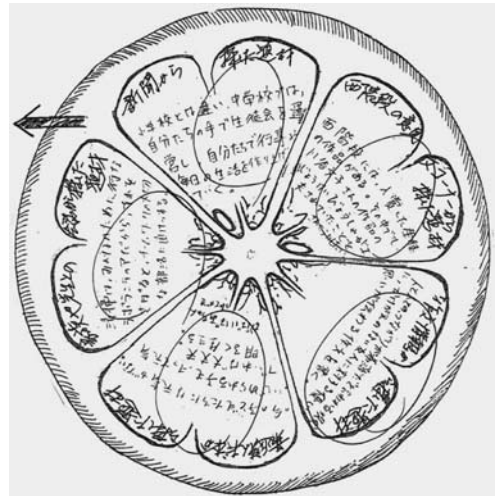
およめにくるなら 梨平にござれ、道の小草に米がなる・・・」(梨平『古代詞』)

毎年、八月の盆踊りが来ると、笛や太鼓三味線に合わせて、梨平古代詞が踊られます。古いも若きも大きなやぐらに囲み、輪になって踊ります。この民謡の歌詞にもあるように、私が住む清里の梨平は、きれいでおいしい水が自慢のふるさとのことです。(以下略)

実際には三つ以外にも型があるし複合型もあるのだが、出だしに苦しむ生徒にとってはヒントとなったし、これを手立てとして作文を書き進めていける生徒が増えてきた。

## ③ スモールステップ～構想メモを準備して書く週末の課題作文～

「書くことがない。」という生徒に限って書くべき素敵な題材を持っていたり、経験をしていたりするものである。意識して見たり聞いたりしていないだけであって、自分の心の窓をのぞかせる機会を取ると、書きたい課題が明確に見えてくる。課題を見つけ課題を絞っていく学習活動の段階で、構想メモ「レモンの窓」として生徒に取り組みさせた。窓は五つである。ア 家族や先生との会話から探した題材 イ「新聞から探した題材」 ウ「西階段の意見文コーナーから探した題材」 エ「『作文情報』から探した題材」 オ「最近読んだ本から探した題材」。意見文コーナーとは、NIEコーナーの中の意見文を掲示したコーナーのことである。新潟日報の日報ジュニア文芸の作品ときらきらキラリに掲載された当校生徒の意見文を展示してあるコーナーを、NIEコーナーと呼んでいる。『作文情報』とは年度初めに生徒に配布する応募作文の一覧表、コンクール名と作文のテーマ、注意点、当校の過去の入賞者などをまとめたプリントである。この窓を埋めるうちに生徒は書くべき題材に気づき、書きたい題材を絞り込んでくる。次に生徒Fのレモンの窓を挙げておく。



生徒F：窓ア 「清掃はみんなのために行うボランティアだから、

それができないなら、チームワークを必要とする活動はみんなできないよ。」清掃の反省会の際の先生の言葉。

窓イ 生徒会活動に関する記事。小学校とは違い、中学校では自分たちの手で生徒会を運営し、行事や毎日の生活を作り上げていく。

窓ウ Kさんの作品の「ケータイ小説と文学は違う」という意見文の情景描写が工夫されていたことを参考にしたい。

窓エ 人と人とのつながりが希薄だと言われる現代に、かけがえのない友人に対する優しい思いが伝わる作文を書く。

窓オ 「今の子どもたちには元気がない。元気でいれば大丈夫。明るく生きる。」がばいばあちゃんのあとがきです。この活動の後、彼は窓アを選んで部活動におけるチームワークを主題とする意見文を書き上げた。

## ④ スモールステップ～論述の型を活用して書く週末の課題作文～

作文の型は目的によっていろいろあるが、自分の立場や考え方を明示するという目的で書く練習をした。題材は

「TVこのセリフ」主人公一美の「オレは、人を好きになることができたなら、それだけで勝ちだと思います。」という新聞記事。これを読んで、主人公である一美のセリフについて意見文を書く。そのために、次の四つの型を提示した。ア「一美の主張に全く賛成であるし、さらに別の根拠や理由も付け足せる。(なぜなら、～。)」イ「一美の主張に賛成するが、ある一点に不賛成である。(なぜなら、～。)」ウ「一美の主張にある点で賛成する。(なぜなら、～。しかし、大体は反対だ。なぜなら、～。)」エ「一美の主張には賛成だが、述べ方について私の意見は違う。(なぜなら、～。)」次に生徒の作品を挙げる。

生徒G：僕は、一美の主張に全く賛成であるし、さらに別の根拠や理由も付け足せる。なぜなら、人を好きになるのは素晴らしいことだし、仲間がいっぱいいれば、ピンチのときに助けてくれるかもしれないからだ。その根拠として僕は、実際にたくさんの助けられたことを挙げる。たとえば、仕事がいっぱいあるときに手伝ってもらったり、勉強を教えてもらったり、言い出したらきりが無い。だから、僕は一美の意見に全く賛成である。

生徒H：私は、一美の主張には賛成だが、述べ方について私の意見は違う。なぜなら、「勝つ」という言葉は少し適切ではないと思うからだ。例えば、誰かが割り込むことのできない二人だけの恋。だから、競うような「勝ち」という感情は生まれないと私は思う。純粹に人を好きになることができたなら、人間として一歩進み、様々な感情が心を駆け回る。だから「勝ち」よりも、心身ともに成長し大人になったと言うほうが適していると私は考える。

身近な新聞の読みやすい芸能欄の新聞記事を題材にしたこともあり、80%の生徒が意見文を完成させて提出することができた。これらのほかにも、キーワード、段落内容や構成、データの分析、反論などをスモールステップにして週末の課題作文の学習を継続している。



## 5 考察

ここでは、三点について考察する。この教材において新聞記事のタイトルを作るという学習の経験がキーワード「意図」の概念を獲得することにつながったか、それに反映された筆者の主張を理解したうえで論理的思考力の高まった意見文を書けたか。そして、週末の課題作文の継続は論理的思考力の養成にどのようにつながったかを考察する。

### (1) 「タイトルを作ろう」の授業において

#### ① 一学期末の生徒の授業評価アンケートより (数字は %)

ア	自分で新聞記事を選べましたか。	はい	100	いいえ	0
イ	自分の立場を決められましたか。	はい	100	いいえ	0
ウ	タイトルを作れましたか。	はい	92	いいえ	8
エ	学習後の作文に反映させられましたか。	はい	86	いいえ	14

レーザーレーザーの水着の記事については「すべての選手に平等な水着を!」「0.1秒でも速い水着を!」「救世主を待つか?それとも…」「ハイテク水着はすでに武器だ!!」等のタイトルを、ガソリン価格の高騰の記事については「手段は買い控え」「車の使用を控えるしかないのか」「ギリギリの値段、たくさんの方のご利用を!」「子会社、涙ちょちょ切れる」等のタイトルができた。自分の立場と意図、タイトルが適応しており、この学習の経験はキーワードの働きと効果を意識化・抽象化・一般化しながらその概念の獲得につながったと言える。

#### ② 学習後の意見文について

ここでは意見文の後段に絞って分析するが、「意図」を入れてまとめた生徒は100%。その意味、働き、効果を理解して学習を反映させた論理的思考力の高まった意見文が書けた生徒は86%。その判断は、意見文中に「本質」「ありのまま」「真実」「振り回されない」「知る」「気づく」「うのみにしない」「公正」「自分から学習」「批判的精神」等の語彙が含まれているかどうかにかんがって求めた。残りの14%の生徒は、「情報の発信者の意図を理解して、それを受け入れることが大切。」というパターンの論調にまとめられる。今までの学習が生かされないことで意見文の内容に深化が見られず、ここからは「意識して書く」という学習活動が行われなかったこともうかがえる。採点した意見文を返却した際に、満点の生徒の作品を参考にして補足の説明をした。

### (2) 週末の課題作文の継続がもたらしたもの

一学期の授業評価アンケートを実施した際に、「入学してから週末の課題作文を継続してきたことで、『書く』という学習活動においてあなたにどのような変化がありましたか。」という質問項目を加えて生徒に答えてもらったところ、ほぼすべての生徒が書く力の向上に役立ったと答えている。具体的には、「文章を作る際の言葉の使い方が変わり、正しい文やその組み立て・構成がわかった。」「意見文などで自分の考えをどうやったら相手に上手に伝えられる

のか、相手を納得させられるのかというところが少し分かってきた。「課題に対して、立場を明確にして対応できる作文が書けるようになった。」「文章で自分の伝えたいことが書けるようになり、『書く』という活動が楽しいものになった。」「自分の考えていることを、自分の言葉でまとめる力がついた。」「文章の構成を工夫したり、ボキャブラリーが増え、自分が表現したいことにより近づいた作文になったと思う。」という意見が多かった。しかし、こんな生徒の声もあった。「書き出しの工夫や、会話文を入れたりすることを意識するようになった。が、意見文や感想文では、自分で結局何を伝えたいのか分からない作文になってしまう。」NRTテストでは偏差値が68で「書くこと」の領域では4の段階の生徒である。「改善点があったら教えてください。」ということだったので、「主張したいことを一つに絞り、頭括型や双括型など、型を使って書いてみよう。」とアドバイスし、週末の課題作文で基本を大切に練習をしている。

二種のテストで数字の推移を追い、分析してみたい。NRTテストでは、小学校卒業時の学力偏差値51.6。「書くこと」の全国比は、101の学習集団であった。中学二年終了時では、学力偏差値55.5。「書くこと」の全国比は106である。内容は「書く材料の収集・内容の明確化」が109、「構成や論理の展開を工夫して書く」が108、「文章を推敲、批評すること」が104である。八月末に届いた全国学力検査は、以下の通りである。

H20 全国学力検査	平均正答率		平均正答率		「書くこと」平均正答率	「書くこと」平均正答率		
全国	国語A	73.6%	国語B	60.8%	国語A	55.2%	国語B	46.7%
当校	国語A	かなり高い	国語B	かなり高い	国語A	かなり高い	国語B	かなり高い

設問別調査結果から関連する項目を拾ってみると、「情報の中から必要な内容を選び、事柄が明確に伝わるように書く」についても「情報を根拠として示しながら、自分の立場を明確にして意見を書く」についても、全国よりかなり高い数字を示している。また、学習状況調査の回答を見ると、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり書いたりしていますか。」について、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」と答えた生徒の割合は、63.1%（全国：42.9%）であった。「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。」については、76.3%（全国：55.5%）の生徒が「はい」と答えている。「解答を文章で書く問題は、最後まで解答を書こうと努力しましたか。」について「努力した。」と答えた生徒は、86.8%（全国：63.3%）であった。この結果は、論理的思考力、筋道立って考えることのできる力の表れの一つととらえている。以上のことから、週末の課題作文の継続は生徒の論理的思考力を高め、書くことに喜びと楽しさを生み、またそれは書くことへの彼らの自信につながり、意欲的に「書く」生徒の育成に効果があったと言える。

## 6 今後の課題

PISAの学力テストで世界第一位のフィンランドと日本の生徒の一番の違いは、朝日新聞の記事にもあったように誤答の種類にある。前者が書いて間違っているのに対し、後者は無解答。我々は、今こそ書ける生徒を育成しなければならぬのではないだろうか。

全国学力検査の生徒へのアンケートにはこんな設問もある。「国語の勉強は好きですか。」「国語の勉強は大切だと思いますか。」「当てはまる。」と答えた生徒は、いずれも全国の約二倍である。そして、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。」の設問については「どちらかといえば」も含め、当校の生徒は100%が「役に立つと思う。」と答えている。この生徒からの期待と信頼の声に、国語科教師としての大きなプライドと責任を感じる。

社会人としての彼らが自分の企画を提出するにしても、学びをレポートにまとめるにしても、そこで必要とされるのは筋道立って考える論理的思考力と、そして書く力である。ここで、今まで実践してきた「書くこと」の学習過程を振り返ってみたい。書くために生徒は言語を吟味する。また、論理的な意見文を書くためには、資料を分析したり情報をしっかり読み取ったりして根拠をあげて書かざるを得なくなる。また、書いたものでスピーチをし合えば「話すこと・聞くこと」の学習活動へとつなげることができる。つまり、このような総合的な学習が国語の学力向上へと結びついていく。今後も「書くこと」の学習活動を核として他の領域との関連学習を図りながら、日々の実践に工夫を凝らし、充実した学習の継続に努めたい。

## 引用・参考文献

- 金子 守 (2008). これからの授業に役立つ新学習要領ハンドブック中学校国語. 時事通信社.  
 井上尚美 (1998). 思考力育成への方略—メタ認知・自己学習言語論. 明治図書 21.  
 植西浩一 (2006). 読み書き関連学習を位置付けた自習編成単元の創造を. 日本国語教育学会誌, 18, 1-4, 10-14.  
 宇佐美寛 (1995). 新版論理的思考, メヂカルフレンド社. 宇佐美寛 (2003). 論理的思考をどう育てるか, 明治図書.  
 木下是雄 (1996). 理科系の作文技術, 中公新書.  
 伊藤敏雄 (2008). フィンランドメソッド書き込み式練習ドリル, 日本文芸社  
 日本言語技術教育学会編 (1997). 言語技術教育 論理的思考力を鍛える作文技術, 明治図書.  
 市毛勝雄 (2007). 論理的文章の書き方指導 中学校編, 明治図書, 108, 14-22.  
 国語3 (2006). 光村図書. 中学校学習指導要領 (2008). 文部科学省.